

船越義珍の空手道近代化における貢献と警鐘

スポーツ文化研究領域

5007A016-3 織田 俊郎

研究指導教員：志々田 文明教授

序章

世界の空手道人口はおよそ 140 ヶ国、4000 万人と言われている。沖縄という一地方の文化であった空手道が日本本土での公的な場に初めて登場したのは、船越義珍（1868-1975）が文部省主催の第一回体育展覧会において空手の演武を行った大正 11 年（1922）6 月と考えられる。以降、国内では大学空手部を中心に各地へ普及が行われ、本格的な海外普及は戦後、1950 年代から本土の空手家達が海外への普及に乗り出した。つまり琉球王国の武術であった空手道は日本本土において約 80 年、海外に向けては約 50 年で普及されたことになる。その内実は、流派の広がりの中で改変された空手道と、旧来からの空手道の区別が明確になされないままの普及であった。一方、競技種目の誕生に伴う練習体系の改変などから沖縄を含めた空手道の近代化が進行する中で、空手道はその形を変え、分裂し、結果として多くの団体、流派が誕生することとなった。その結果、「空手道とは何か」という問い、つまり他の武道や格闘技の中における空手道の位置づけを明らかにできないまま空手道が社会に発信されることになった。このことは空手道が柔道、剣道などと並ぶ日本発の武道として世界的普及をみている現状においては大きな問題である。本研究では、空手道近代化の歴史の過程において重要な役割を担った船越義珍の活動

の特徴を中心に、空手道近代化の歴史について考察する。船越はその生涯の中で近代における空手道が辿った変化の歴史を全て目の当たりにし、自身もその変化に深く関わっている。その功績から船越は「近代空手道の父」「空手中興の祖」と呼称されており、空手道の歴史を考察する上で重要な存在であると言える。

船越義珍の生涯における活動から空手道近代化へと繋がる要点を取り出し、その特徴について考察する事は近代空手道研究の基点となるものであり、武道、格闘技の中で今現在ある空手道というものの位置づけをより明確にすることに繋がると考える。

第一章 船越義珍の空手道修行・指導歴

船越義珍は琉球下級士族・船越義枢の長男として明治元年(1868)首里の山川村で出生。6 歳の時に棒術を父から学ぶ。明治 12 年（1879）首里手の大家、安里安恒（1828-1905）の下で空手道の稽古を開始。明治 21 年（1888）頃から安里の同門である系洲安恒（1831-1915）にも師事する。大正 11 年（1922）文部省主催による第一回運動体育展覧会に出席。空手道史上初の本土での公式演武。三日後下富坂の講道館に招かれ、演武を行い、嘉納治五郎（1860-1938）の勧めによって、本土に留

まり空手道の普及活動を行う事を決意する。当初は沖縄県人学生寮「明正塾」で指導を行う。大正13年(1924)空手道史上初めての段位を発行。同年、初の大学空手部である慶應義塾大学唐手研究会が発足、船越が初代師範に就任する。以降、東大、拓殖大、早大、商大、医科大など、大学を中心に空手道の普及、指導を行うようになる。昭和10年(1936)『空手道教範』を出版。同書において「唐手」を「空手道」に改める事を発表し、以降「空手」表記は一般的なものとして定着する。昭和32年(1957)死去。

第二章 空手道近代化における船越義珍の役割

第一節 近代武道としての課題

第一章での船越の稽手道修行・指導歴から、船越を中廃とした空手道の近代化の過程には、まず糸洲安恒による活動があった。それまで秘密主義・個人指導で行われていた空手道を、青少年の身心の鍛錬に用いるという主張をもって、糸洲は空手道を学校体育に導入させる事に成功した。

糸洲の作成した空手道指導の枠組みを受け継いだ船越は、日本本土での普及活動を開始し、柔道・剣道に代表される本土在来の武道に接する事により、本土での普及活動においては従来の空手道の枠組みを再構成する必要を実感することとなった。

船越は日本武道の枠組みに空手道を参入させる為に、嘉納及び講道館柔道の思想を踏襲する事で日本武道としての空手道の作成に取り組んだ事が明らかになった。

第二節 日本武道としての空手道

船越が空手道を日本武道の枠組みに参入させるにあたり、最大の課題となったのは、試合制度及び試合に繋がる「自由組手」の制定であった。二人一組で型を行う柔道・剣道とは異なり、空手道の稽古体系の中心である単独型は、技を行使する相手を自分の好きな様に解釈する事ができてしまうため、それが実際の動きの中で発動できるのかという点で実用性に疑問が持たれており、更にそれを用いて実際に技をかけあい、実力を測る事の出来る稽古が存在しなかった。船越は「型」から「自由組手」への段階的発展を研究しており、「約束組手」を制定し、慎重に自由組手への段階的発展を考えていた事が明らかになった。

終章

船越義珍の活動による空手道近代化への貢献は、1.柔道の手法を主に踏襲して日本武道の枠組みへの参入を試みた事。2.「型」から試合制度へと繋がる「自由組手」までの段階的発展の為に、様々な種類の約束組手を制定し、自由組手にあっても、慎重にその過程に関与していた事である。

船越の警鐘としては、船越は終生、空手道においては型が稽古の第一である事を説いた。これは、単独型という独自性が、自由組手との乖離によってその価値を失う事を怖れた為であり、約束組手の活用によって、技法の独自性を守り、空手道としての枠組みを保持しようとした為であると考えられる。